

## 英語冠詞の定性と意味記述

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-06-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河村, 道彦 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00005684">https://doi.org/10.14945/00005684</a>

# 英語冠詞の定性と意味記述\*

On the proper treatment of definiteness in pedagogical English grammar

河村 道彦

Michihiko KAWAMURA

(平成 22 年 10 月 6 日受理)

## 1 はじめに

中学校や高等学校の教育現場でコミュニケーション能力が重視されるようになって久しい。実践的な英語運用能力の育成という社会的な要請もあって、英語は理解すべき「知」の対象から人と人との通信手段へとその姿を大きく変えた。こうした流れのなか、大量の英語に触れさせたり、英語を使って諸々の活動をさせたりする試みに関心が集まる一方で、有意味なコミュニケーション活動を下支えするはずの言語能力の養成、とりわけ意識的な文法学習が軽視されるようになってきた。実際、言語形式に注意を払う習慣を持たず、英文法といえばハートで感じるものくらいに考えて大学に入って来る学生も少なくない。

実際のコミュニケーションにおいては伝達目標の達成が第一であって、言語的な豊かさや正確さが主要な関心事である必要はない。とはいっても、高度な英語運用能力を駆使するには相応の文法能力が不可欠であり、限られた時間の中で外国語としての英語を効率よく学び、それを自信を持って使うには、英語ということばの仕組みについて明示的な理解を持っておくことが重要である。英語教育において明示的な言語知識の教授が果たす役割が低下するなか、教育英文法の整備はこれまで以上に積極的に取り組まれるべき分野となっている。

本稿では、英語の冠詞の意味記述を題材に、「学校文法」という名でゆるく特徴づけられる記述文法の体系が典型的にもつ問題点を指摘し、高度な能力の獲得を目指す学習者や教室での言語活動をデザインする英語教師の参考書としての教育英文法のあり方を考察する。以下、第2節で学校文法の記述様式に関する一般的な問題を指摘し、続く第3節で最近の意味研究の成果に基づいて *a* と *the* の使い分けに関する記述の見直しを提案する。

## 2 学校文法の記述様式

まず、「学校文法」とよばれる教育英文法の伝統的な枠組みがかかる一般的な問題について冠詞の用法記述の観察を通じて論じたい。ここで学校文法と呼ぶのは、高校生から教員、一般社会人ぐらいまでを対象に伝統文法の枠組みに基づいて英文法を概説した一連の文法書のことである。<sup>1</sup> これらの文法書の多くは言語学者によって著され、近年の言語研究によって得られた知見を随所に盛り込んでいるものの、無用な混乱を避けるためか言語事実を整理する枠

組み自体には手を加えず、基本的に伝統文法のそれを踏襲している。学校文法の問題点については、岡田(2001)に次のような手際のよいまとめがあり、言語事実とその提示の2つの面において問題が指摘されている。

現在の学校文法にはいろいろな問題がある。まず、間違った規則や語法、ナンセンスな説明、現在では通用しなくなった規則や語法がいまだにあとを絶たない。相変わらず、多くの例外を伴う適用範囲の狭い「規則」が並んでいる。言語事実の列挙に終始し、言語事実に対する納得のいく説明がなされていない。また、日本語と異なるために学習者にとって習得困難となるポイントが集中的に手当されているわけでもない。規則と例外が等しく扱われているなど、メリハリがない。(岡田 2001, p.6)

学校文法における言語事実の提示は、記述対象となる用法を辞書で語義を並べるように用例とともに列挙してゆくスタイルが典型的である。冠詞の用法の記述においても「～を表す場合」というような見出しのもとに、複数の用法が順番に並べられてゆく。学習用英語辞典の近年の進歩の著しさと比較すると、学校文法の記述様式はあまりに代わり映えがなく、旧態依然の感が否めない。以下では、学校文法の問題点の多くがこの伝統的な記述様式に由来することを冠詞の用法の記述を通して確認するとともに、言語研究から得られた知見を体系的に反映させるにはどうすればよいかという点に関していくつかの指摘を行う。

まず、冠詞は該当する語彙項目が *a* と *the* に限られるため、用法を列挙することだけを考えると辞書も文法書も大差がない。しかし、文法書には辞書にはない利点というものも存在する。それは、語彙項目に縛られない体系的な記述が可能であるという点である。例えば、多くの文法書では、「定冠詞の用法」、「不定冠詞の用法」といった項目とならんで「無冠詞の用法」という見出しを持っている。辞書では *a* や *the* と違って音形をもたない無冠詞のような項目が見出しに来ることはない。もっとも従来の文法書がこの語彙項目からの自由という利点を十分に活かしているとは言い難い。というのも、無冠詞の用法としてあがるのは「呼びかけの場合」、「官職などを表す語が補語の場合」、「同格の場合」など、可算名詞が無冠詞になる周辺的な用法ばかりで、冠詞を伴わない裸名詞句そのものに目をむけた記述ではないからである。関連する語形の対立を例語とともにまとめるところとなる。

	可算名詞		不可算名詞	
無冠詞	*rabbit	rabbits	beer	*beers
不定冠詞	a rabbit	*a rabbits	*a beer	*a beers
定冠詞	the rabbit	the rabbits	the beer	*the beers
	単数形	複数形	单数形	複数形

限定詞を伴わない *rabbits* のような形式は裸複数形と呼ばれ、これが単に *a rabbit* のような不定単数形を複数形にしたものではなく、むしろ *beer* のような裸質量名詞句と意味論的によく似た性質を持つことが Carlson (1977) の研究によって明らかにされている。両者はともに種を表す総称用法を持つほか、照応形の解釈においても同様の振る舞いを示す。例えば、不定冠詞によって導かれる句が後続する代名詞と照応関係を結ぶと(1a)が示すように両者は同一の個体を表すことになるが、(b) や (c) の裸名詞句の場合にはこのような制限はない。したがって、*a*

*rabbit* と *it* は同じウサギでなければならないが、*rabbits* と *them*、*beer* と *it* はそれぞれ別のウサギ、別のビールと解釈されてよい。

- (1) a. Harriet caught *a rabbit* yesterday, and Ozzie caught *it* today.  
 b. Harriet caught *rabbits* yesterday, and Ozzie caught *them* today.  
 c. Julie frank *beer* fast, but Tricia drank *it* slow. (Carlson 1977)

これは、(b) の裸名詞句の部分を *some rabbits* のような量化表現で置き換えた場合に、不定冠詞を用いた場合と同様の、同じ個体を表す解釈がえられることと対照的である。

学校文法において裸名詞句の用法が体系的に記述されないのは、これが冠詞のような特別な印を伴わない形式であることと無関係ではない。文法書は辞書とは異なり目に見えない要素についての記述が可能であるので、このような形態統語論的に無標な形式についても積極的に記述を行うべきである。

学校文法の目に見えないものに対する配慮の無さは、意味に関する区別においてより顕著である。例えば、*a* は単数形とのみ共起するとしたうえで *a* の様々な用法については記述するが、では \**a rabbits* の形が使えないときに不定複数の指示対象をどう表すのかといった意味的な観点からの説明はあまりなされない。*books* なのか *some books* なのか、両者にどんな違いがあるのかといった記述は、英語を話したり書いたりするうえで役立つ実用的な情報である。コミュニケーションのための文法ということを考えると、形式的な体系性だけでなく意味的な体系性に基づいた記述が望まれる。

学校文法には、何を記述するかという点に加えて、どう記述するかという点においても問題がある。学校文法では、列挙される用法の間の関係が明示されることは少なく、最初に出てくる用法が基本的なものであろうとか、よく似たものは関連した用法であろうというように読み手の常識や推論に委ねられる部分が多い。記述する用法の区別が多くなるといくつかを基本用法とか一般用法という名前で束ね他と区別することになるが、その場合もなぜそれらが1つに束ねられるのかについての説明はない。以下では、これが冠詞の意味記述において様々な問題の原因になっていることをみてゆく。

まず、用法の单なる例挙では用法間の一般性がよく理解されず、单なる用例の分類で終わってしまう。次はある文法書における定冠詞 *the* の基本的な用法の分類である。ここからは *the* が单義なのか多義なのか、各用法間にどのような意味的なつながりがあるのかということがみてこない。

- (2) a. 前述の名詞をくり返す場合  
 b. 既出の事物に関連したものをさす場合  
 c. その場の状況によって明らかな場合  
 d. 唯一物をさす場合  
 e. 最上級の形容詞、first, last, only, same, very などで限定されている場合  
 f. 名詞に修飾語句が伴う場合

このような記述に対して、特定の文法事項についての明快な解説を狙って書かれた語学書の多くは次のようなシンプルな説明を行う。(3) では聞き手の存在が、(4) では指示の一意性が強調されているが、両者を統合した聞き手による一意的識別可能性 (unique identifiability) という

概念を用いて説明されることも多い。

- (3) the ~ : 他のものから区別され、限定されて、聞き手がその指示対象を理解できるものを表す。  
 (久野・高見 2004)
- (4) the の意味 : ただ 1 つ (複数形の時はただ 1 つのグループ) に決まる
- 文脈からただ 1 つに決まる場合
  - 連想が働いてただ 1 つに決まる場合
  - その場の状況からただ 1 つに決まる場合
  - 常識的にただ 1 つに決まる場合
  - 共通の知識から 1 つに決まる場合
- (大西・マクベイ 1995)

従来の学習文法においてこのような一般性が見過ごされていたかといえば必ずしもそうではないが、列挙される用法の前に 1~2 行で簡潔に述べられていたり、特定の用法の記述の中に深く埋め込まれていたりしている場合が多く、特に大事なものとして取り立てられているわけではない。一方、(3) や (4) の記述に共通していえるのは取り扱う全ての事例を 1 つの原則によって説明しようという姿勢である。その違いはほぼ同様の構造をもつ (2) と (4) を比較すると歴然である。ここで提示の問題として取り上げるのはこのような意味である。

意味的一般性が問題となるのは基本的な用法に限らない。周辺的とされる用法の多くは、何らかの点で例外的であるがそれ以外の点では基本用法の延長線上にある。不定冠詞の場合を見てよう。例えば次にあるように、不定冠詞 *a* は可算単数名詞を基本とし、それ以外の種類の名詞とともに使用されるものは特殊とされる。

- (5) a. 普通名詞・集合名詞に添える場合
- 漠然と 1 つのものをさす場合
  - 総称的用法の場合
  - ‘one’ の意を表す場合
  - ‘the same’ の意を表す場合
  - 配分の意を表す場合
- b. 固有名詞につく場合
- c. 物質名詞・抽象名詞につく場合

可算と不可算の対立において可算名詞であることの意味、「*a+单数形*」という形のもつ意味はそれぞれ次のようなものとされる。

- (6) a. 可算名詞になるもの : まとまりをもち具体性があるもの  
 (大西・マクベイ 1995)
- b. *a(n) ~* : 明確な形をもつ单一の個体を表す。  
 (久野・高見 2004)

名詞の中には *chicken* のように可算 (鶏) と不可算 (鶏肉) の 2 つの用法をもっているものが多くあるが、どちらの解釈になるかを決めるのは言語的な文脈である。複数形にしたり不定冠詞をつけたりして可算名詞として扱ってやれば個体として解釈され、裸单数形にして非個体の解釈を強いると料理や食肉の解釈となる。同様のことは、通常可算か非可算か片方の用法しか持たない名詞についてもいえる。例えば、通常不可算の *lunch* を可算名詞の環境で使うと、「昼食会」のような始まりと終わりをもつ時空上に存在する出来事の解釈となる。また、通常は食

用に供されない犬や蛇も不定冠詞なしで非個体の解釈が食肉の意味に解釈される。姓を表す固有名詞から「～家の～」という意味が得られるのも同じ原則による。

- (7) a. Bush's visit to *a lunch* with Republican senators is meant to prod his party to support the legislation.<sup>2</sup>
- b. *Dog* is a popular food in Borneo, New Guinea, the Philippines and other countries, whereas *snake* is a delicacy in China.<sup>3</sup>
- c. Don't hate on Hillary because she is just awesome even if she lies, she is *a Clinton* after all.<sup>4</sup>

ここで重要なのは、このような意味の多様性が不定冠詞のもつ用法の多様性によって生み出されているものではなく、逆に不定冠詞の有無が一定の意味をもつてることによって引き起こされているということである。ある言語的な文脈において要求される意味の型とそこに実際に与えられた表現の意味の型にズレが生じた場合に、その表現の意味を一定の約束事にしたがって求められた型に調整する操作を強要と呼ぶ(cf. Pustejovsky 1995)。強要は名詞句の解釈に限らず文法のいたるところで観察される現象であるため、どのように呼称するかは別として、後に述べる有標性の概念とともに文法と意味をつなぐ重要な原則として学校文法に導入されるべきであると私は考える。例えば「動物」から「食材」への意味的な拡張を強要規則の形で辞書の中に存在する一般性として位置づけると、個々の単語について学習しなければならない語義が減るとともに、不定冠詞の用法記述も簡素化することができる。

強要はこのような言葉と意味の体系性に加え、その創造的な側面にも関わっている。例えば次の(a)の文は車に轢かれてひとつの個体として認識できないような残念な姿になった猫が飛び散っていることを表す。ただし、このような解釈は上でみた食材としての解釈と比べると安定性を欠き、(b)のように少し文脈を変えるととたんに成り立たなくなったりする。

- (8) a. There was *cat* all over the driveway.
- b. \*I saw *cat* all over the driveway. (Filip 1999)<sup>5</sup>

(8)のような例は興味深いが、意味解釈は基本的には言語が世界をどう見立てているかという問題であって、話し手が自分の見立てを自由に言語に反映できるというわけではない。このような言語の慣習的な側面を軽視すると過剰な創造性による誤用につながる可能性がある。

学校文法の記述様式の問題として最後にあげるのは、項目間の関連性が明らかにされないとすることである。項目間の関連性の記述が悪いと規則の適用範囲が分からなくなり、何が基本でどれが特殊か、個々の用例がどの規則によって説明されるべきなのかといった大事なことが読み手のセンスに丸投げされることになる。

例えば、次の(a)では1つの個体を表しているという点では同じなのに2つ目の*a dog*は意味的に不適格になる。これは先行する*a dog*と同じ指示対象を持つということを*it*や*the dog*のような照応表現を使って表す必要があるからである。では、初出でかつ不特定の指示対象を表せば*a*が可能かというと必ずしもそうではない。(b)では不定名詞句が誰のことを言っているのか話し手にすら分からず状態を表しているにも関わらず*a same individual*という形が不適格になっている。これは*same*という表現によって*the*の使用が求められるからである。

- (9) a. \*I bought a dog for my daughter, and she liked *a dog*.  
 b. \*The two victims must be murdered by *a same individual*, whoever that is.

このような例があるにも関わらず(6)において不定冠詞の基本的な意味が極めて単純な形で示されているのは、不定冠詞をともなう形が可算单数名詞句の最も一般的な意味を表すと考えられているからである。これは上で行った不定冠詞の意味の説明がほとんど名詞の可算性の説明となっていることからも分かる。言語学では一般的なものを無標、特殊なものを有標とよび、両者が競合した場合には有標な方が優先されるというようなものの見方をする。<sup>6</sup>これにあてはめると(9)で問題にした不定名詞句は不定冠詞の適用条件を充すと同時に、より優先順位の高い定冠詞の適用条件も充たしているため、定名詞句が優先され不定名詞句の方は阻止されるということになる。一般的なものよりは特別なもの、特別なものよりも例外的なものが優先されるというある意味当たり前のことであるが、異なる表現の意味の競合を考えるうえで非常に便利な見方である。このような考え方は、「ふつう平日は学校に行くけど夏休みは行かない、夏休みでも登校日だったら学校にいく」というような身の回りによくある事例から理解可能な仕組みなので、学校文法に組み込むことも難しいことではないようと思われる。

以上、この節では学校文法の記述様式を問題として取り上げ、音形を持たない要素や意味にも目配りをしたうえで、情報の発信にも役立つような体系的な記述をめざすべきであると論じた。また意味論的な一般性を記述するうえで、有標性や強要といった概念が重要であることを指摘した。文法と意味の関わりを明示的に特徴づけるには、冠詞の場合の「特定」や「総称」のような、説明の基本的な部分を構成する抽象的な概念に日常語としての用法に由来する恣意的な解釈がなされないような工夫も必要となってくる。

### 3 冠詞の意味記述に向けて

前節では、学校文法の典型的な記述では項目間の関連が必ずしも明確に示さないまま用法が羅列され、それにより十分な説明力が得られていないことを指摘した。冠詞の意味記述においては、中心的な原則はどれか、その他にどのような一般性があるのか、どの用例がどの原則によって説明できるのか、例外はどのような意味で例外であるのか、こういったことを明らかにしていく必要がある。前節ではまた学校文法的な説明の対極にある分かりやすい説明の例として、大西・マクベイ(1995)や久野・高見(2004)における定冠詞・不定冠詞の意味の記述を紹介した。いずれも定冠詞、不定冠詞にそれぞれ单一の働きを割り当てている点で魅力的であったが、説明の対照とするデータの範囲を考えるともう少し細かな区別が必要である。以下では、不定冠詞、定冠詞のそれについて、教育英文法で触れておかなければならぬ最低限の意味論的な区別について論じる。

#### 3.1 特定のものを表す *a*

まず、不定冠詞には、不特定の1つのものを表す無標の解釈に加え、特定的な解釈が存在する。次の(a)のような文では2つの解釈の違いは重要でないように感じられるかもしれないが、例えば(b)にあるように否定文にしてやると2つの全く異なる解釈として現れてくる。特定的な解釈ではあるミスプリントをビルが見落としたことを、非特定的な解釈では1つのミス

プリントもビルの目に入らなかつたことを表す。

- (10) a. Bill found a misprint.  
 b. Bill didn't see a misprint.

(Karttunen 1976)

また、遊佐(2007)によれば、*a*を特定用法で使わなければならない場面で日本人学習者は次のように誤って*the*を使つてしまふ傾向にあるという。

- (11) a. \*The certain teacher scolded me.  
 b. \*I didn't buy the particular book.

(遊佐 2007)

このような理由から、特定のものを表す*a*の用法は、他とは独立した1つの用法として取り扱うのが適切であると考えられる。

### 3.2 「もの」を数えない *a*

不可算用法を基本とする名詞に不定冠詞がついた場合の解釈の中には、単に可算名詞は個体を表すというだけではカバーできない事例が存在する。分かりやすいのが *different wines* (いろんなワイン) のような不可算名詞が種類を表すとされる場合である。種類は形ではなく質の違いをもつて数えるものなので、これを時空上の存在である個体に変換してから数えるというのはおかしな話である。したがつて、「もの」を数える *a* と別に種類を区別する *a* というのが存在すると考えなくてはならない。ここで「種類を数える」という言い方をしないのは、種類にはそれを数える一意的な方法がないからである。種類を数えることは可能であるが、識別される種類の数は分類の基準や深さによりいくらでも変わりうるものであるため、数えあげられた数値自体が何らかの意味をもつとは限らない。

これに関連すると思われる用法に具体性を表す *a* というのがある。例えば、*lunch* という名詞は通常不可算であるが、前に *light* のような形容詞がつくと不定冠詞を伴つて *a light lunch* の形になる。

- (12) a. We had ***lunch*** at the cafe.  
 b. We had ***a light lunch*** at the cafe.

次に示すのは「～で（軽い）昼食をとる」にあたる表現を Google を使って検索してみた結果であるが、不定冠詞の使用に関して判断の揺らぎがほとんどないことが推察される。<sup>7</sup>

“have lunch at”	約 1,650,000 件	“have a light lunch at”	約 49,000 件
“have a lunch at”	約 49,300 件	“have light lunch at”	11 件

このような例に対してすぐに言えることは、不可算名詞の意味が形容詞により具体化され個体を表す *a* と共にできるようになったというふうな説明が誤りであるということである。こののも、種類としての具体性と物理的な存在としての具体性は別物であるうえに、そもそも具体性を問題にするのなら上位概念である *meal* が数えられて *lunch* が数えられないことのほうを問題と考えるべきである。より多くの例を検討する必要があるが、ここで関係が深いと思われるものはむしろ修飾語句の存在である。可算名詞にも形容詞がつくと種類の解釈が容易になり、

次にみるように種類と個体の2通りの解釈が可能になる。

- (13) We are importing *a new Italian shirt*.

(Quirk et al. 1985)

もし種類の解釈が形容詞の働きによって生じるのであれば、取りあえず冠詞の意味論としてここで深追いすることはない。

### 3.3 *the* と文脈における唯一性

定冠詞の意味論は伝統的に既出性 (e.g. Christophersen 1939) や唯一性 (e.g. Russell 1905) といった概念を用いて説明されてきた (cf. Lyons 1999; Abbott 2004)。ここでは、唯一性を文脈上の概念として扱うことにより既出性との両立を目指した Roberts (2003) の考え方をもとに *the* の意味論の基本を特徴づける。

学校文法では定冠詞を次の (a) のような同じものを表す先行詞をもつ例によって導入することが多いが、実際の話し言葉や書き言葉ではこのような例は全体の4割程度であるという (Poesio and Vieira 1998; Spenader 2002)。その他の例の多くは直接の先行詞はなくとも (b) や (c) のように、常識や関連する語句の働きにより文脈に唯一的な指示対象が存在するものと理解される場合である。

- (14) a. Fred was discussing *an interesting book* in his class. I went to discuss *the book* with him afterwards.  
 b. I went to *a wedding* last weekend. *The bride* was a friend of mine. She baked the cake herself.  
 c. What's wrong with *Bill*? Oh, *the woman he went out with last night* was nasty to him. (Hawkins 1978)

先行文脈から唯一的な指示対象の存在が想定できない場合には、次のように不適格な談話が生まれる。

- (15) a. \*Fred was discussing *the interesting book* in his class.  
 b. \*I went to *a wedding* last weekend. *The child* was a friend of mine.  
 c. \*What's wrong with *Bill*? Oh, *the woman* was nasty to him.

ここで注意しておく必要があるのは、*the* によって求められる唯一性が発話の文脈における談話の世界の唯一性であって、談話の外の世界がどうなっているのかという意味での唯一性ではないということである。例えば、次の文には定冠詞によって導かれる *the dog* の他に *another dog* が登場し、唯一性に基づく分析の例外になるようにみえる。しかし、文脈における唯一性という立場を取れば、*the dog* が前提とするのは発話の文脈に犬が1匹だけいるということがあるので、*the* の使用時に特定の1匹だけが話題になっているのであれば条件はみたされ、その時点で談話に登場していない別の1匹については考慮に入れる必要がないのである。

- (16) *The dog* had a fight with *another dog* yesterday.

(McCawley 1979)

### 3.4 識別可能性と *the*

前の節において「聞き手にこれと分かる」とか「識別可能である」といった言葉を避け、文脈上の唯一性という概念を用いてきたのには2つの理由がある。ひとつには、唯一性の概念が重要であるからである。Ko et al. (2010)によれば、学習者は唯一的でなくとも文脈から存在が前提とされただけで *the* を使ってしまう傾向があり、例えば、次のような文脈で「その犬の中から一匹」という意味で *a puppy* とする代わりに定冠詞を使い *the puppy* してしまうような誤用が多く見られるという。<sup>8</sup>

- (17) Amy knows that this pet shop has *five puppies* and six kittens. [...] She has not quite decided yet. But she definitely wants to buy *a puppy*. (Ko et al. 2010)

識別可能性 (identifiability) という言葉を避けたもう1つの理由は、それと分かる (identify) という言葉から何か特定の指示対象との結びつきが想起されるからである。ところが、*the* は聞き手による指示対象の識別を要求しない。例えば次の例において *the same people* が誰であるか、聞き手は何も知つておく必要がない。

- (18) There were *the same people* at both conferences. (Prince 1992)

さらに、学習者には自分にとって特定の指示対象について言及する際に唯一性を考慮に入れずに *the* を過剰使用してしまう傾向がある。Ionin et al. (2004, 2008)によると、言語には冠詞によって聞き手にとっての唯一性に関する区別を行うタイプのものと話し手にとっての特定性に関する区別を行うタイプのものがあり、潜在的には可能な2つの区別にズレが生じる領域において学習者の文法に揺らぎが生じやすいという。例えば、(19a)のように話し手が識別可能な唯一物を表す場合や、(19b)のように話し手による識別が不可能でかつ唯一指示をもたない対象を表す場合には誤用は生じにくいが、(20a)のように唯一物であっても話し手による識別ができない場合や、(20b)のように話し手にとっては特定であるが唯一的な指示対象を表さない場合には、それぞれ *a* や *the* を誤って使う傾向があることが実験により確認されている。

- (19) a. I would like to meet *the author of that book* someday—I saw an interview with her on TV, and I really liked her!  
 b. I don't really know where Jonathan is. He is staying with *a friend*—but he didn't tell me who that is. He didn't leave me any phone number or address.
- (20) a. I would like to meet *the author of that painting*—unfortunately, I have no idea who it is, since the painting is not signed!  
 b. I am here for a week. I am visiting *a friend from college*—his name is Sam Brown, and he lives in Cambridge now.

識別可能性という概念は文脈から切り離されると「誰にとって」の部分が曖昧に理解される可能性があり、その場合には(20)のような誤用を助長する危険性をはらんでいる。使わなくてすむのならそれに越したことはないと思われる。

### 3.5 不定の *the*

定冠詞の用法の中には、唯一性の概念を用いて説明することのできない特別な用法も存在する。次の(a)を例に取ると、ここで問題にしているのは日本語で「その事故は朝起こった」というときのような「その朝」でも「ある朝」でもない漠然とした「朝」を表す *the morning* の解釈である。

- (21) a. The accident happened in *the morning*. (織田 2002)
- b. Are you ready to order? — Yes, I'll have *the salmon steak*, please. (久野・高見 2004)
- c. You've got *the wrong number*.

このような *the* が唯一的な指示対象と結びつかないことは、次の(a)において 2 つの朝が同一の朝である必要がないこと、(b) に現れる悪い時、悪い場所、悪い人々がすべて異なりうることからも確認できる。この種の *the* を不定の *the* と呼ぶことにしよう。

- (22) a. The accident happened in *the morning*, and another one is waiting to happen in *the morning*, too.
- b. It seems like Christ always had a reputation for being with *the wrong people* at *the wrong time* in *the wrong place*.<sup>9</sup>

不定の *the* は学校文法では慣用によるものとされてきたが、最近は *the* のもつ一意的識別可能性に結びつけて説明されることも多い。例えば、次の(a)の *the morning* は朝昼晩のうちの昼や晩と、(b) の *the salmon steak* はメニュー内の他の要素と、(c) の *the wrong* は正誤の正と、というように特定の要素からなる集合の他の要素との比較において一意的に識別されると説明される。このような説明の適否は別にして、そこから何か有意味な一般化が行えるかというと難しい。というのも、(a) の *morning* を *night* に変えたり、(b) で食べ物を飲み物に変えたり、(c) の正誤を異同に置き換えたりと類例を探っていくと無視できない確率で不定の *the* の解釈をもたない文が生じるからである。したがって、教育英文法においては重要なのは、不定の *the* が特殊な用法である強調したうえで、その範囲を明確に示すことである。

- (23) a. The accident happened { at night / \*at the night }.
- b. Are you ready to order? — Yes, I'll have { a latte / \*the latte }, please.
- c. Okay, I'll try { a different / \*the different } number.

不定の *the* には上で見たものの他にも次のようにいろいろな種類のものがあるが、タイプを分類してカタログの形で示すことはできても、こういう環境で生じるというのを一般化した形で述べることは難しい。<sup>10</sup>

- (24) a. [Hotel concierge to guest in a lobby with four elevators] You're in Room 611. Take *the elevator* to the sixth floor and turn left. (Birner and Ward 1994)
- b. John got these data from *the student of a linguist*. (Poesio 1994)
- c. I'll read *the newspaper* when I get home.
- d. He went to *the hospital*. (Carlson and Sussman 2005)

これらの例においても不定の *the* の慣用性は顕在で、(b) の of 句を関係詞節で置き換えたり、(c) の新聞を本に変えたり、(d) の病院に修飾語句をつけたりすると、とたんに通常の定名詞句の解釈に変わってしまう。

- (25) a. John got these data from *the student who studies with a linguist.* (Poesio 1994)  
 b. I'll read *the book* when I get home.  
 c. He went to *the 5-story hospital.* (Carlson and Sussman 2005)

不定の *the* によって導かれる名詞句の意味については Carlson and Sussman (2005) の心理言語学的な実験を通じてもう少しだけ詳しいことが明らかになっている。最も重要なのは、不定の *the* の解釈が不定冠詞が表すような単純な個体解釈ではないということである。例えば (26a) の *go to the hospital* という表現は、単なる空間移動を表す *go to a hospital* とは違って病院に治療に行くというような *the* に続く名詞部の本来的機能に関連した解釈をもつ。これは可算名詞の裸单数形を用いた *go to school* と *go to a school* の対立と並行的である。実際に、この *hospital* という語に関してだけいえば、アメリカ英語で *go to the hospital, in the hospital* というところでイギリス英語は *go to hospital, in hospital* という表現を使っており、2つの形式に接近が見られる。ただし、このような考え方方が (24b) にある of 句を伴うタイプなど不定の *the* 全般に応用可能であるのかなど分からぬことが多い。

- (26) a. John went to { the hospital / school }. (通院／通学)  
 b. John went to { a hospital / a school }. (空間の移動)

### 3.6 まとめ

最後に「ピアノを弾く」に相当する英語表現を使って、ここまで見てきたことをまとめておきたい。まず、楽器の演奏には不定の *the* を用いた *play the piano* のという形が利用可能である。この形は「ピアノを弾く」というよりは「ピアノ演奏をする」というような感じの、個体よりも出来事に重きをおいた表現である。この特別な用法の存在によって、同じような意味を表すために *play a piano* というより一般的な形を使うことは出来なくなる。不定冠詞が使えるのは、*play a real piano* のように楽器名に修飾語句がつくことによって対応する不定の *the* が使えなくなった場合や、*I wanna play a piano, not a keyboard or a bass guitar.* のように他の個体と対比されている場合、あるいは特定の個体を表す場合である。最後の用法として使用する場合には聞き手から「で、どのピアノ弾きたいの」と問われる可能性があることを予期しておかねばならない。不定の *the* に加えて、*play the piano* という形にはもちろん文脈に1つだけ存在する個体を表すという用法がある。1台のピアノを目にして、あるいは誰かが1台のピアノを買ったと耳にして *I wanna play the piano sometime.* というような場合がそれにあたる。さらに *play piano* と冠詞なしでも使えるが、この場合は個体性を失い、もはや楽器ではなくなっている。*play jazz on the piano* というような構文の *jazz* の位置に入る *piano* である。したがって、少し極端だが *I tried to play piano on the guitar.* ということもできる。こうした場合の *piano* はピアノの音とかピアノ向けの音楽とかそういう意味になるのであろう。

#### 4 おわりに

冠詞は学習者が触れる頻度が最も高い語であると同時に、最も習得が困難な文法項目であることが知られている。<sup>11</sup> 例えば日本人学習者 167 人の英語インタビューにおける冠詞の誤用を分析した和泉・井佐原 (2004) の研究では、上級レベルの学習者においても 100 名詞あたり 9.7 個の冠詞の誤りが検出されたと報告している。また、遊佐 (2007, p.251) は日本の英語教育の現場について次のような厳しい認識を示している。

英語学習者は、冠詞システムに関して明示的な教授を受けることが殆ど無いために、冠詞の学習を諦めてしまい、その結果、不正確な言語表現が固定化し、特定の冠詞の誤りが絶えず規則的に現れる化石化現象を経験する。この化石化が日本人の英語教授者自身に生じている場合には、不正確なインプットを英語学習者に与え続ける可能性があり、教授が学習者の化石化を助長するという悪循環を生み出している。

冠詞の意味論の習得にインプットの量が貢献しないのであれば、冠詞の用法についての明示的な規則を意識的な学習によって学ぶか、意図的に構成された質の高いインプットから演繹的に学び取るか、いずれかしかないであろう。どちらの方策をとるにしても必要となるのは整備された教育英文法である。

本稿では、現代英語の定冠詞 *the* および不定冠詞 *a(n)* の意味記述についての議論を通じて、コミュニケーションのための英文法という観点から学校文法の記述様式の問題点を論じ、いくつかの点において改善の方向性を示唆した。教育文法において英語冠詞の意味や用法がどのように記述されるべきか、その具体的な姿については別に論じる必要がある。

#### 注

\* 本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C））「日英語を中心とした情報構造上の概念についての多角的研究」（課題番号 20520436）の助成を受けて行われた研究の一部である。

1. 1978 年の学習指導要領改訂で英文法の検定教科書が廃止されて以来、公式に学校文法と呼べるものはないが、「5 文型」や「意味上の主語」といった概念や記述様式など、日本独自の伝統的なスタイルを持っている。
2. <http://blogs.wsj.com/washwire/2007/06/12/immigration-bill-dead-or-alive/>
3. Judith E. Brown (2008). *Nutrition Now*. Belmont, CA: Wadsworth.
4. [http://www.huffingtonpost.com/2008/04/03/richardson-denies-saying\\_n\\_94988.html](http://www.huffingtonpost.com/2008/04/03/richardson-denies-saying_n_94988.html)
5. (a) は Ronald Langacker、(b) は Charles Fillmore による例文である。
6. 有標性の概念は言語学の様々な分野で様々な使われ方をしており、何についてどんな意味で使うか、言語学的な文脈ではもっと厳密に扱う必要がある。
7. 2010 年 9 月のある日に言語を英語 (lang\_en) 地域をアメリカ合衆国 (countryUS) として検索した結果である。
8. Ionin らは、日本語と同じく冠詞を持たない朝鮮語やロシア語を母語とする英語学習者と英語を母語とする子供の冠詞の意味論の獲得を比較し、両者の誤用に共通のパターンがあること、同種の誤用が既に英語と同タイプの冠詞をもった言語を母語として習得している学習者に

は生じないことを報告している (Ionin et al. 2004, 2008; Ko et al. 2010)。以下では、日本語と同じタイプの言語を母語とする学習者を単に学習者と呼ぶこととする。

9. R. Larry Moyer (1997). *31 Days with the Master Fisherman: A Daily Devotional on Bringing Christ to Others*. Kregel Publications.
10. 例えば、Birner and Ward (1994) はバスや電車のように経路が予め決まっている移動 (e.g. 24a) と自動車や自転車のように任意のルートをとれる移動 (e.g. *take the taxi*) を比較し、前者にのみ不定の *the* の解釈が可能であるという William A. Ladusaw の指摘を紹介している。Roberts (2003) は、この経路の唯一性と *the* の表す文脈上の唯一性を同一視する分析を提案しているが、同様の分析が他の例にも可能かといえばそうではない。
11. 例えば、20 億語以上からなる Oxford English Corpusにおいて最も高頻度な語は *the* であり、*a* も *be, to, of, and* に続いて 6 番目によく使われる語とされている (The OEC: Facts about the language. <http://oxforddictionaries.com>)。

### 参考文献

- Abbott, Barbara. 2004. Definiteness and indefiniteness. In Lawrence R. Horn and Gregory Ward (eds.) *Handbook of Pragmatics*, 122–149. Oxford: Blackwell.
- Birner, Betty and Gregory Ward. 1994. Uniqueness, familiarity, and the definite article in English. In Susanne Gahl, Andy Dolbey, and Christopher Johnson (eds.) *Proceedings of the 20th Annual Meeting of the Berkeley Linguistic Society*, 93–102.
- Carlson, Greg. 1977. *Reference to Kinds in English*. Ph.D. dissertation, University of Massachusetts at Amherst. Published 1980, New York: Garland.
- Carlson, Greg and Rachel Shirley Sussman. 2005. Seemingly indefinite definites. In Stephan Kepser and Marga Reis (eds.) *Linguistic Evidence: Empirical, Theoretical and Computational Perspectives*, 71–86. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Christophersen, Paul. 1939. *The Articles: A Study of Their Theory and Use in English*. Copenhagen: Einar Munskgaard.
- Filip, Hana. 1999. *Aspect, Eventuality Types, and Nominal Reference*. New York: Routledge.
- Hawkins, John A. 1978. *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*. London: Croom Helm.
- 樋口昌幸. 2009. 『英語の冠詞：その使い方の原理を探る』. 東京: 開拓社.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ionin, Tania, Heejeong Ko, and Ken Wexler. 2004. Article semantics in L2 acquisition: the role of specificity. *Language Acquisition* 12, 3–69.
- Ionin, Tania, Maria Luisa Zubizarreta, and Salvador Bautista Maldonado. 2008. Sources of linguistic knowledge in the second language acquisition of English articles. *Lingua* 118, 556–576.
- 石田秀雄. 2002. 『わかりやすい英語冠詞講義』. 東京: 大修館書店.
- 和泉絵美・井佐原均. 2004. 「日本人英語学習者の英語冠詞習得傾向の分析」. 和泉絵美・内元清貴・井佐原均(編)『日本人1200人の英語スピーキングコーパス』, 131–139. 東京: アルク.
- Karttunen, Lauri. 1976. Discourse referents. In John McCawley (ed.) *Syntax and Semantics 7: Notes*

- from the Linguistic Underground*, 363–385. New York: Academic Press.
- Ko, Heejeong, Tania Ionin, and Ken Wexler. 2010. The role of presuppositionality in the second language acquisition of English articles. *Linguistic Inquiry* 41, 213–254.
- 久野暉・高見健一. 2004.『謎解きの英文法：冠詞と名詞』. 東京: くろしお出版.
- Lyons, Christopher. 1999. *Definiteness*. Cambridge University Press.
- McCawley, James D. 1979. Presupposition and discourse structure. In Choon-Kyu Oh and David A. Dineen (eds.) *Syntax and Semantics 11: Presupposition*, 371–388. New York: Academic Press.
- 織田稔. 2002.『英語冠詞の世界：英語の「もの」の見方と示し方』. 東京: 研究社.
- 岡田伸夫. 2001.『英語教育と英文法の接点』. 京都: 美誠社.
- 大西泰斗・ポールマクベイ. 1995.『ネイティブスピーカーの英文法』. 東京: 研究社.
- Poesio, Massimo. 1994. Weak definites. *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory* 4, 282–299.
- Poesio, Massimo and Renata Vieira. 1998. A corpus-based investigation of definite description use. *Computational Linguistics* 24, 183–216.
- Prince, Ellen F. 1981. Toward a taxonomy of given/new information. In Peter Cole (ed.) *Radical Pragmatics*, 223–255. New York: Academic Press.
- Prince, Ellen F. 1992. The ZPG letter: Subjects, definiteness, and information-status. In William C. Mann and Sandra A. Thompson (eds.) *Discourse Description: Diverse Linguistic Analyses of a Fund-raising Text*, 295–325. Amsterdam: John Benjamins.
- Pustejovsky, James. 1995. *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Roberts, Craige. 2003. Uniqueness in definite noun phrases. *Linguistics and Philosophy* 26, 287–350.
- Russell, Bertrand. 1905. On denoting. *Mind* 14, 479–493.
- 斎藤武生・鈴木英一. 1984.『冠詞・形容詞・副詞』. 講座・学校英文法の基礎 第3巻. 東京: 研究社.
- Spenader, Jennifer. 2002. *Presuppositions in Spoken Discourse*. Ph.D. dissertation, Stockholm University.
- 遊佐典昭. 2007.「第二言語獲得における冠詞の個別性と普遍性」. 溝越彰・小野塚裕視・藤本滋之・加賀信広・西原俊明・近藤真・浜崎通世(編)『英語と文法と: 鈴木英一教授還暦記念論文集』, 241–253. 開拓社.